Tulips University of Tsukuba Repository

大学生のレポートにおける原因・理由を表す文型について ： 作文教育への応用を目指して

著者	湯本 かほり, 木戸 光子
雑誌名	筑波大学留学生センター日本語教育論集
号	29
ページ	43-57
発行年	2014-02
その他のタイトル	A Study of Sentence Patterns Used by University Students Expressing Cause and Reason : application in the field of Japanese language writing class
URL	http://hdl.handle.net/2241/121206

大学生のレポートにおける原因・理由を表す文型について

―作文教育への応用を目指して―

湯本　かほり　　木戸　光子

要　旨

本稿では、日本の大学の文章表現の授業で大学生が書いた中間・期末レポートおよびレポートに類した作文の計４種を対象に、原因・理由を表す文型の中から作文教育に必要な文型を質的に特定することを目的とする。同じ原因・理由を表す文型であっても、ジャンルやテーマ、文章の構成によって使用に偏りが見られることや、出現位置に傾向があることなどから、こうした観点からの文型の意味記述の可能性をさぐる。
【キーワード】大学生のレポート　原因・理由　基本文型　発展文型　配列

A Study of Sentence Patterns Used by University Students Expressing Cause and Reason : application in the field of Japanese language writing class

YUMOTO Kahori, KIDO Mitsuko

【Abstract】 In this paper, we aim to specify qualitatively sentence patterns expressing cause and reason appearing in midterm and final reports, which were similar to reports written by university students. Such sentence patterns are needed for Japanese composition teaching. Even in cases where identical cause and reason sentence patterns are used, a skew may be observed in usage according to genre, theme, and discourse structure, and tendencies regarding positioning of the patterns in the composition are also apparent. We explore the possibility of describing the meanings of the sentence patterns based on these points.
【Keywords】 written reports of university students, cause and reason, basic sentence patterns, developmental sentence patterns, arrangement

1．はじめに

日本語学習者が参照する日本語文型辞典における文型は、その全てが作文を書く際に必要となるわけではない。日本語学習での語彙使用において、読んだり聞いたりしたらわかるという理解語彙、および、書く・話すという表現として運用できる使用語彙の違いと同様の違いが見られる。日本語母語話者であっても文型辞典にある膨大な文型項目をすべて表現として運用できるとは限らない。さらに、使用文型の中でも文型にも使用頻度の高いものと低いもの、および特定の文章ジャンルにのみ使用頻度の高いものと低いものに分けられる。

本稿では、日本の大学の文章表現の授業で大学生が書いた中間・期末レポートおよびレポートに類した作文の計４種を対象に、原因・理由を表す文型の中から作文教育に必要な文型を質的に特定することを目的とする。特に、原因・理由を表す文型をその使用頻度から「基本文型」と「発展文型」とに分け、これらの文型が文章のどの位置において使用されているのか、文型の「配列」にも注目する。今回の調査では、「配列」に注目することによって同じ原因・理由を表す文型であってもジャンルやテーマによって使用に偏りが見られることや、出現位置に傾向があることがわかった。本論文では、こうした観点からの文型の意味記述の可能性をさぐる。

2．文章構造における文型の使用頻度の捉え方

使用頻度については、現在、日本語教育の分野でもコーパス言語学の手法が取り入れられ、書き言葉や話し言葉コーパス、母語話者や日本語学習者の産出した日本語コーパスなどが作成され、それらのコーパスを言語資源として頻度情報に基づく研究も行われている。ただし、特定の言語形式の頻度の偏りが存在することが文章構造の中で何を意味しているか、といった構造分析と融合した研究はあまりなされていない。本研究では、文型の出現頻度を統計的な検定で検証するのではなく、ある程度の頻度のある文型が文章の中で構造的にどのような役割を担うのかを「配列」という構造の関係性に着目して捉えることを試みる。

文章構造分析において言語形式の頻度を取り上げる場合、特定の言語形式が文章構造の中でどのような展開機能を持つのかが問題とされる。すなわち、文章論の文章構造の分析では、言語形式の頻度によって文章構造の展開機能を特定し、さらに構造体としての関係性を明らかにしている。このような文章構造における関係性の研究としては、永野（1986）の「主語の連鎖」「陳述の連鎖」のような「連鎖」の研究があり、「連鎖」では同種の文法機能を持つ言語形式の文章展開における関係性を意味している。また、市川（1978）の「文の連接」に見る「連接」のような文と文との相互関係、さらに、同じく市川（1978）の冒頭から終結までの文章の流れの中での位置関係や順番を見る「配列」がある。「連鎖」

や「連接」は言語形式を特定しやすく、構造の可視化も文章構造図として明示可能である。一方、「配列」は、文章の流れの中でどのような要素がどこに出現するかという順番が特定しにくく、構造の可視化が難しい関係性である。しかし、手紙のように文章の中で出現する要素が特定しやすい文章ジャンルの文章では「配列」の重要性は明らかである。例えば、依頼の手紙では、はじめの挨拶・前置き・依頼・依頼理由・終わりの挨拶といった要素が文章のどの位置に、どのような順番で現れるかによって、依頼の手紙としての適切さが認定できる。

このような文章構造の中で文型の使用状況を捉えることは、日本語教育では学習効果のある文型記述のあり方を考える上で重要な意味を持つ。日本語教育の文型辞典や作文教科書では、使用頻度の高いとされる言語形式を文型として取り上げて、文型の意味用法を例とともに記述するものが見られる。確かに、レポートや論文について使用頻度の高い文型を覚えておくと、実際にレポートや論文を書く際にそれらの文型が使用できる。しかし、作文授業で学習者の書いた作文を見ると、覚えた文型を他の語句と組み合わせる、段落の中で位置づけるなど適切な使用ができず、意味不明の作文となっているものがある。学習者が実際の作文で文型を使用するための規則やストラテジーなどが運用に役立つ記述になっているかどうかを検証しなければならない。つまり、学習に有用な文型として抽出されて意味用法を記述された文型を、再び文章の中に戻してその意味用法の記述が作文に有用な記述かどうかという学習効果の検証が必要になるのである。

木戸・湯本（2012）の調査では、日本人大学生の意見文、および随筆風の自由作文であるエッセーという2種の作文において、調査対象とした文型辞典の全文型の20％前後が使用されている一方、約80％は使用されていないことを指摘した。このことから、作文教育においては使用文型の中でも使用・未使用の条件などが日本語学習者への文型提示には必要な情報ではないかと考えた。目標とする文章作成のための重要性に基づく文型の分類方法として、「基本文型」と「発展文型」とがあることを提案した。

「原因・理由」にカテゴライズされる文型であっても、その個々の意味は個別に異なり、よく使用されるものとそうでないものとがあることは容易に想像できる。しかし、その使用の偏りの要因は文体差や意味制約によるものなのだろうか。本稿では、使用頻度に基づく分類である「基本文型」と「発展文型」とを配列という観点から捉え直すことで、文章構造と使用頻度の関わりを明らかにし、原因・理由の文型を捉え直す。

3．文型抽出の手順

3．1　文型辞典および作文教科書との照合

『日本語文型辞典』（グループジャマシイ 1998）に掲載されている原因・理由を表す文型は、82種類である。調査対象とする文型を抽出するために、これらの文型がどれだけその

他の文型辞典２種（『日本語表現文型辞典』『日本語誤用辞典』）および作文教科書４種（『留学生のための論理的な文章の書き方』『小論文への12のステップ』『論文ワークブック』『大学・大学院生のための日本語④論文作成編』）に共通して取り上げられているかを照合した。

なお、文型辞典が文型を網羅するものであるのに対し、誤用辞典は学習者が間違いやすい文型を取り扱っているという点で異なっている。いずれにしても学習者にとって学習上重要であると考えられる文型である点では共通している。したがって、ここでは誤用辞典を文型辞典と同列に扱っている。また、文型を抽出した作文教科書はどれも大学および大学院で学ぶ留学生を対象にレポートや論文といったアカデミックライティングを目的とした教科書である。そのため、各教科書に取り上げられた文型はどれもレポートや論文に頻出するものである。そのため、これらの文型は本研究の調査対象とするレポートおよびレポートに類する文章に出現しやすいだろうと予測し、照合対象の文型とした。

照合の結果、最大４種に共通して掲載されている文型は「ため」「によって」「による」、３種に掲載されている文型には「というのは」「なぜ…かというと」「から」「そこで」「ので」、２種に掲載されている文型は「それで」であった。以下、表１に示す通りである。

表１　文型辞典および作文教科書における文型の掲載状況

意味	形式	表現文型辞典	誤用辞典	留学生のための論理的な文章の書き方	小論文への12のステップ	論文ワークブック	大学・大学院生のための日本語
原因・理由	ため	○	○	○	—	—	○
	によって	—	○	○	—	○	○
	による	—	○	○	○	—	○
説明・理由	というのは	○	○	—	○	—	—
	なぜ…かというと	—	—	—	○	○	○
理由	から	○	○	○	—	—	—
	そこで	—	○	—	○	—	○
	ので	○	○	○	—	—	—
	それで	—	○	—	—	—	○

○＝掲載あり，—＝掲載なし

3．2　作文データとの照合

次に、これらの文型について大学生の作文データにおける実際の使用状況と照合する。

データは筆者の一人が2000年に日本の大学の商学部１年生に対して文章表現の授業で収集した作文４種であり、受講者のうち授業の全作文の研究使用承諾を得た学生33名（うち３名は日本語を母語としない留学生）のうち、日本人大学生30名の作文を調査対象とした。なお、各種作文は受講者の欠席によりデータの数に偏りがある。４種の作文の内訳は、意見文「４月と９月入学（４月）」、中間レポート「どのように利用すべきか（どのように）」、新聞の解説記事の要約文「よいデザイナーの条件（デザイナー）」、期末レポート「言葉遣い（言葉）」の４種類である。括弧内は以下論文内で使用するテーマの略称を示す。

表２に抽出した文型と作文データとの照合結果を示す。全てのテーマに共通して使用されている文型は「ため」、「から」、「ので」であった。このことから、これら３種の文型がレポートにおいて原因・理由を表す「基本文型（木戸・湯本　2012）」であり、作文教育において優先的に教えられるべき文型と考えられる。一方で、使用数の合計自体は少ないもののテーマによって使用の偏りが見られる文型に「によって」「による」「というのは」「そこで」がある。よって、本稿では基本文型である「ため」「から」「ので」の出現位置、および、「によって」「による」「というのは」「そこで」の出現位置に注目する。なお、使用数が極端に少ない「なぜ…かというと」「それで」は今回は考察の対象としない。

表２　レポートにおける文型使用数

共通する文型辞典・作文教科書	形　式	意　味	４月と９月入学	どのように利用すべきか	よいデザイナーの条件	言葉遣い	計
総文数（データ数）			112(15)	713(30)	303(29)	1853(27)	―
４種	ため	原因・理由	3	14	7	34	58
	によって	原因・理由	0	5	0	0	5
	による	原因・理由	0	4	0	1	5
３種	というのは	説明・理由	2(3)	0(3)	2(2)	5(10)	9(18)
	なぜ…かというと	説明・理由	0	0	0	1	1
	から	理由	14	14	14	49	91
	そこで	理由	0	6	1	11	18
	ので	理由	5	18	1	18	42
２種	それで	理由	0	0	0	1	1

なお、「というのは」における括弧内の数は「説明」の意味として使用されている数を表す。

4．基本文型と発展文型

木戸・湯本（2012）では、グループジャマシイ（1998）にある中上級日本語文型161項目に基づいて作成した意味機能別リストの全1213文型に対し、課題作文のレポートおよび自由作文のエッセーの二つの作文における使用状況を調べ、その使用頻度の多寡から基本文型と発展文型とに分けられることを指摘した。基本文型は作文の文型として汎用性の高いものであり、発展文型は特定の種類の作文に限定して使用される可能性の高いものを指す。

本稿では、レポート形式で書かれた作文における原因・理由を表す文型を対象としているため、表2はレポートにおける基本文型と発展文型を反映したものとなっている。念のため、他のジャンル（エッセー・手紙文）と合わせて見てみる。表3はジャンルによる文型使用数をまとめたものである。「ため」「から」「ので」はエッセーや手紙文でも用いられており、これらの形式が全てのジャンルにおいても汎用性の高い基本文型であることがわかる。

表3　ジャンルによる文型使用数

共通する文型辞典・作文教科書	形式	意味	4月と9月入学	どのように利用すべきか	よいデザイナーの条件	言葉遣い	～と私(エッセー)	手紙文	計
総文数（データ数）			112(15)	713(30)	303(29)	1853(27)	454(28)	525(23)	―
4種	ため	原因・理由	3	14	7	34	7	4	69
	によって	原因・理由	0	5	0	0	0	3	8
	による	原因・理由	0	4	0	1	1	1	7
3種	というのは	説明・理由	5	3	4	15	0	3	30
	なぜ…かというと	説明・理由	0	0	0	1	0	0	1
	から	理由	14	14	14	49	1	17	109
	そこで	理由	0	6	1	11	1	0	19
	ので	理由	5	18	1	18	24	15	81
2種	それで	理由	0	0	0	1	0	0	1

5．文章における配列

ここまでは作文データの中での文型の出現数という頻度を見てきた。しかし、本稿では、原因・理由文型を文型辞典や教科書への掲載数、その使用頻度によって単純に「教えるべき・教えなくてもよい」のように二分するのではなく、抽出した文型について「配列」という観点から分析し、質的な文型の意味記述を目指す。

「配列」とは、文自体の質的内容とそれらがどのような順番で出現するかによって示される関係性である。市川（1978：104-112）では「配列的観点」について「文の配列の相違に立脚しており、より具体性を帯びる」としている。そして、配列的観点としては3つ挙げ、まず、文の内容の質的相違として「事実を述べた文」「見解を述べた文」「事実と見解を交えた文」を挙げている。次に、ガの主語の文を「未知に属する事柄を叙述する文」としている。さらに、文末表現の類型として、タ系列・非タ系列・特殊という系列を挙げている。この「系列」というのは永野（1986）の「連鎖」に似ている。しかし、連接的観点と配列的観点を分けて、文自体の持つ性質による統括と、文相互の関係の持つ統括を分けたところに永野との違いがあると考える。市川（1978：105）は「文の前後関係を扱うものであるから、ある種の配列の類型は、それを抽象化していけば、連接の類型に還元されるという場合もある」という。確かに接続表現に代表される連接的観点は、接続詞がなくても順接や補足など文自体の内容から文相互の関係がわかる場合がある。

「配列」に関して注意すべき点は、文相互の順序と文章全体での出現位置という二つの観点があることである。例えば、渡辺（2004）の小学生の作文分析では時系列か因果律かの判断は文相互の前後関係が判断基準になっているが、これは文相互の順序の問題である。一方、佐々木（2001）の日本語母語話者の作文の分析では文章のどの位置に意見が出てくるかという文章全体における出現位置の問題である。

今回の調査では、原因・理由を表す文型の出現位置を対象としており、中には以下の(1)のように文末において文型が使用され全体が原因・理由文となっているものもあれば、(2)や(3)のように従属節中や名詞句中に使用され文全体が原因・理由文を表さないものもある。そのため、本稿では先行研究の見方とは異なり、「文型の配列」として当該文型が使用された文が文章全体のどの位置において使用されているのかという観点に立って見ていく。

(1) まず、「鈴木は・・・」と「鈴木課長は・・・」の割合が高いのに対し、「鈴木さんは・・・」が非常に少ないのは、「さん」が尊敬語であるためである。

(2) 学校は社会に出る前の準備段階なのであるから、校則はとても意味のあることである。

(3) 気晴らしは、空白の時間、そこから生じる退屈による不安を埋めることを言う。

6．基本文型の出現位置

基本文型である「ため」「から」「ので」に関するグループジャマシイ（1998）の説明は次の通りである。

(4)　ため　「…が原因で」の意味。

(5)　から　話し手が主体的な立場でおこなう依頼・命令・推量・意志・主張などの理由を述べる時に使う。そのため「ので」と比べて主観性が強い。

(6)　ので　前の節で述べたことが原因や理由となって後ろの節で述べることが起こるということを表すのに使う。前のことがらと後ろのことがらの因果関係が客観的に認められるものである場合に用いられる。

各々が表す原因・理由の意味は文型辞典や教科書にある説明に委ねるとする。出現位置に注目してみると、これらの文型は文章の中間部に現れる傾向がある。中間部においては、(7)のように事実や事例を述べ、考察する際や自身の主張を裏付ける際にこれらの文型が使用されている。括弧内は、（テーマ，出現段落番号/全段落，出現文番号/全文数）を表す。

(7)　また、この結果から、(6)の下線部の敬語における日本人全体の敬語力は高いことがわかる。これは、下線部の敬語が典型的な敬語で判り易いためだったと思われる。（言葉，14/16，71/91）

一方で、開始部、終結部における使用も見られた。開始部において使用が見られたのは、基本文型のうち、「ため」「から」のみであり、最初に述べた主張に対する理由・根拠を述べる場合に使用されている。

(8)　一般的なデザイナーは、完璧な絵を目指すが、絵の中に何でも入れてしまった“満腹”的な絵は、顧客には受け入れられない。顧客は自分の感情を移入できる余地を残した絵を求めているからである。（デザイナー，1/2，2/4）

終結部においては、「ため」「から」「ので」のいずれも確認できる。まとめの部分における使用であるため、主張を支持するための理由や根拠を述べる際に使用されている。

「ため」

(9)　会社の受付の人が、外部の人に自分の会社の鈴木課長のことを話す場合、地域によって考え方が違うため、名字だけの「鈴木は・・・」と役職名を付けた「鈴木課長

は・・・」と大きく二つに分かれているが、名字だけの「鈴木は・・・」の方がこれからの社会では適切であると思う。(言葉，14/14，26/26)

「から」

(10) そして、言葉は私達の生活と共に生き変わっていくものだから、この調査をまた10年後にした時には、同じ結果にはならないと思う。(言葉，14/14，25/25)

(11) そういったことがなければ、インターネットはとても便利なものなのだから。(どのように，1/2，16/16)

「ので」

(12) 4月入学にしろ9月入学にしろ良いときもあれば悪いときもあるので、どちらがどうとは言えません。(4月，5/5，11/11)

(13) なお、女性の場合、男性よりもお酒に弱いとされているので、適量をやや控えて考える必要がある。(利用，3/3，17/18)

なお、基本文型であっても『4月』の場合は「ため」「ので」よりも「から」がより使用されていることや、『デザイナー』では「ので」がほとんど使用されておらず、やはり「から」が多く使用されている。一方で『どのように』や『言葉』ではどの基本文型もそれなりに使用されている。このことは、そもそも総文数が『4月』と『デザイナー』では少ないために使用される文型も結果的に少なくなったものと考えられる。しかし、それでも「ため」「ので」よりも「から」が多く選択されたのには、テーマによる影響が考えられる。つまり、文型の使用・不使用はジャンルだけでなく、テーマによっても影響されることが考えられる。

7．発展文型

今回の調査で発展文型としたのは、「によって」「による」「というのは」「そこで」であった。これらの発展文型はあるテーマに集中して使用されているものや、逆にまったく使用されていないものも見られる。使用が集中する要因、使用されない要因について考察する。

7.1　によって

「によって」は、グループジャマシイ（1998）によると「それが原因となって」の意味を表し、後ろには結果を表す表現が続くとされる。

表４　「によって」使用数

形　式	意　味	４月と９月入学	どのように利用すべきか	よいデザイナーの条　件	言葉遣い	計
によって	原因・理由	0	5	0	0	5

(14)　私の不注意な発言によって、彼を傷つけてしまった。（グループジャマシイ　1998：456）

「によって」は『どのように』以外での使用が見られない。『どのように』において、「によって」がどのように使用されているか見てみる。筆者ID15は「「大学ランキング」をどのように利用すべきか」というテーマを設定し、中間部において、大学ランキングの影響の良い面と悪い面とをそれぞれ挙げている。以下の例は、悪い面について述べている段落の最後に現れている。

(15)　そしてなによりも、それぞれの大学が持つ個性的な特色（大学の伝統、校風）が、ランキングによって、損なわれるという点であろう。（どのように，2/3，38/51）

この例だけでなく、他の４例も「悪い点」について述べる際に原因・理由の「によって」が用いられている。これは、「によって」が原因を表すことから、悪い面を挙げる際に用いられたのだと考えられる。

文章表現の授業において受講生はあらかじめ、モデル文によって作文の構成を学習し、作文を書くにあたって作文の構成が指示されていた。『どのように』では、「開始部：～とは何か→中間部：～のいい面・～の悪い面」→「終結部：～をどのようにすべきか」という構成に基づいて書くように指示されている。ある特定の文型を使用するように指示がされていないのにもかかわらず、同じ箇所において同じ文型を使用した例が見られたことから、文型の中には文章の構成と関わりを持つものがあるということが示唆される。

7．2　による

表５　「による」使用数

形　式	意　味	４月と９月入学	どのように利用すべきか	よいデザイナーの条　件	言葉遣い	計
による	原因・理由	0	4	0	1	5

「による」はグループジャマシイ（1998）によると、「動作主」「原因」「根拠」を表し、動作主や原因を表す用法は、書き言葉的なかたい文体で使われるとある。

「による」は『どのように』において４例見られ、それ以外では『言葉』で１例のみ見られる。実際の使用例を見てみると、中間部において使用されており、「Ｎ１によるＮ２」のかたちで用いられている。

⑯　気晴らしは、空白の時間、そこから生じる退屈による不安を埋めることを言う。（どのように，2/3、10/23）

「Ｎ１によるＮ２」は例えば、「Ｎ１によって生じる、引き起こるＮ２」のように「によって」を用いて言い換えることが可能である。『どのように』では「悪い点」を挙げる場合に使用されている例が、４例中３例見られた。１例のみ「良い点」を挙げる段落において用いられている例が確認できたが、「原因」よりも「手段」の意味に近いといえる。

⑰　例えば、1950年代に入りストレプトマイシンなどの開発により、結核による死亡率は激減した。（どのように，2/3，7/19）

なお、『言葉』では次のように終結部において使用されている。

⑱　外来語の増加による日本語体系の破壊や誤用の多さが叫ばれているのもまた事実である。（言葉，5/5，22/24）

「によって」同様に、「による」も文章の構成に関わる文型であると考えられる。

7．3　というのは

表６　「というのは」使用数

形　式	意　味	４月と９月入学	どのように利用すべきか	よいデザイナーの条　件	言葉遣い	計
というのは	説明・理由	2(3)	0(3)	2(2)	5(10)	9(18)

※括弧内は「説明」として使用されている用例数

「というのは」は、すべてのテーマで使用され、27例と使用頻度も高くこの点から見れば基本文型と考えられるが、「というのは」は27例中18例が説明として用いられている。

(19) 人を思いやる気持ちというのは生きていくなかで一番大切なものの一つだと私は思う。（どのように，2/4，9/38）

理由として用いられる場合は、「というのは…から」もしくは「というのは」のみでも「から」が復元できるかたちで現れる。そのような例は9例であった。

「というのは…から」は、中間部において主張を支持する理由を述べたり、考察したりする際に用いられている。なお、文頭に「というのは」が現れる例は『4月』において1例、『デザイナー』において2例見られ、他の4例は「～というのは…から」という形で用いられている。

(20) というのは、まず、第一に春は出会いと別れの季節であるという自分なりの観念じみた考えがあるからです。（4月，1/1，2/4）

(21) 性別に見ると、男女共「気を使っている」の割合が10代で最も低いというのは、まだ社会経験が少なく、話す相手と自分との関係をよく理解したうえで話す能力が乏しいからではないか。（言葉，8/9，21/29）

「というのは」は『どのように』における使用が見られないが、『どのように』ではそうした位置において、「なぜなら…からだ」「からだ」が使用されている例がみられた。使用例が少ない『4月』や『デザイナー』の場合でも同様であった。レポート形式の作文では文頭において「というのは」よりも「なぜなら」が用いられやすいということが考えられる。

(22) インターネット上でのショッピングには特に気をつけなければならない。なぜなら、悪質な業者がいるからである。（どのように，2/3，15/28）

(23) まず初めに、どちらがいいかと言ってしまうと、どちらでもありません。なぜなら私は4月入学しか経験していないからです。（入学，1/5，2/11）

(24) しかし、一度消費者の手に渡ると、その商品は、全くの別物となる。なぜなら、常に自分の感情がキティーに反映されるからである。（デザイナー，3/3，7/9）

7.4　そこで

表7　「そこで」使用数

形　式	意　味	4月と9月入学	どのように利用すべきか	よいデザイナーの条件	言葉遣い	計
そこで	理由	0	6	1	11	18

「そこで」は、グループジャマシイ（1998）によると「ある事情を前提に、改まって次に何かを提案する」とあるが、作文では開始部の終わりに多く現れ、これから述べることの予告をする際に使用されている例がみられた。特に、『どのように』『言葉』ではレポートの序論にあたる開始部に使用されている。

(25) そこで、このレポートでは、文化庁の「平成９年度　国語に関する世論調査」と明治大学商学部１年生に対して行った同じ調査の結果をもとに、人間関係と敬語の関りについて述べる。（言葉，1/5，3/34）

『４月』は入学時期が４月と９月のどちらがよいとするか意見を求める課題であり、『デザイナー』は新聞の要約文であるため、これから述べる主張の方向性が既に定まっているために改めて内容の予告をする必要がないことが考えられる。

８．文型使用の偏りの要因

表２や表３からは、文型の使用頻度によって原因・理由を表す文型の基本文型と発展文型とに分けられる。しかし、基本文型であってもテーマによってはそれほど使用されていないものや、基本文型の中でもよく使われているものとそうでないものとに分けられる。今回の調査では、「から」がどのテーマの作文においてもよく使用されているのに対し、「ため」「ので」はそれほど使われていないことがわかった。「ため」は主として原因を表すことから、使用される文脈が「から」「ので」よりも限定的であることが考えられる。一方、客観的であるとされる「ので」よりも主観的であるとされる「から」がレポート形式の作文において多く用いられるというのは意外であった。しかし、今回調査対象としたのは大学生の作文であり、学術的な論文における原因・理由の文型の使用傾向を見ると異なる結果が得られる可能性も考えられる。こうしたことから、「レポートであるから『ので』を使用する」「エッセーであるから『から』を使用する」のように一概にジャンルによってその使用を区別できるものではなく、同じジャンルであってもその中でも更にタイプ分けができることが考えられる。

文体や文型の選択は、文章のジャンルによって異なる。例えば、理由を表す「そこで」はレポートでは「これから述べる内容についての予告」として使われていることを6.4で見たが、今回の調査ではエッセーや手紙文においては「そこで」はほとんど使用されていない。

また、今回の調査から、作文の構成と特定の文型とのむすびつきがあることがわかった。6.1でみた「によって」は、『どのように利用』のみに使用されていた。『どのように利用』では、あらかじめ「良い面」「悪い面」を挙げて書くという文章構成の指定があり「によっ

て」は「悪い面」を挙げる段落において使用されていた。どのような課題を書き手に要求するかによっても、文型の選択が異なってくる。つまり、文型の使用・不使用には文章の構成も関係していることが考えられる。

さらに、文型の選択の要因として作文の「テーマ」も関わっていることが考えられる。今回の調査では言及していないが『どのように』においては、他の作文よりも「べき」の使用頻度が高い。これはテーマである『どのように利用すべきか』に影響されたことが考えられる。

9．おわりに

本稿では、大学生のレポート形式で書かれた作文を対象として、原因・理由を表す文型の中から作文教育に必要な文型を特定した。今回の調査から、レポート形式の作文の原因・理由の「基本文型」は「ため」「から」「ので」であり、「発展文型」は「によって」「による」「というのは」「そこで」であることがわかった。

また、配列に注目することによって、出現位置の傾向および文型使用の偏りの要因についても考察した。まず、原因・理由の基本文型や発展文型は主として文章の中間部において使用されているという傾向が見られた。その一方で「そこで」のように開始部のみに現れる文型もあることがわかった。

次に、基本文型であってもテーマによって使用頻度の高低があることや、発展文型の場合ではあるテーマに使用が集中する文型と、どのテーマにおいても少数ではあるが使用されている文型がある。こうした文型使用の偏りの要因には「ジャンル」「テーマ」「文章の構成」があることがわかった。このように、配列という観点から原因・理由の基本文型と発展文型を捉えなおすと、文章構造と文型との関係が浮かび上がってくる。本稿では配列的観点から文型を捉え直す試みの一端を示した。

なお今回は、大学生のレポート形式で書かれた作文を対象としたが、学術的に書かれた論文を対象としていない。論文作成に有効な基本文型・発展文型を明らかにするためには、データの種類を増やす必要があると考える。また文型使用・不使用の要因については、レポート形式の作文だけではなく今回扱わなかったエッセー・手紙文も合わせてみる必要があると考える。いずれも今後の課題としたい。

付記

本稿は、2013年９月29日に学習院女子大学で行われた日本語／日本語教育研究会第５回大会におけるポスター発表をもとに修正・加筆したものである。

謝辞

本研究はJSPS科研費 23520611（学術研究助成基金助成金　基盤研究C　平成23～25年度　研究代表者木戸光子）の助成を受けたものである。データ提供および作成にご協力くださった方々に感謝いたします。

参考文献

アカデミックジャパニーズ研究会編著（2005）『大学・大学院生のための日本語④論文作成編』アルク

市川孝（1978）『国語教育のための文章論概説』教育出版

市川保子（2010）『日本語誤用辞典』スリーエーネットワーク

木戸光子・湯本かほり（2012）「意味機能別文型から見た大学生の作文の使用傾向」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』28号：333-350

グループジャマシイ（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版

佐々木泰子（2001）「課題に基づく意見の述べ方－日本人大学生の場合・日本語学習者の場合」『日本語教育のためのアジア諸言語の対訳作文データの収集とコーパスの構築』平成11-12年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書研究代表者前田（宇佐美）洋、国立国語研究所日本語教育センター：219-230

友松悦子・和栗雅子・宮本淳（2007）『どんな時どう使う 日本語表現文型辞典』アルク

友松悦子（2008）『中級日本語学習者対象　小論文への12のステップ』スリーネットワーク

永野賢（1986）『文章論総説』朝倉書店

二通信子・佐藤不二子（2003）『留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク

浜田麻里・平尾得子・由井紀久子（1997）『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版

渡辺雅子（2004）『納得の構造―日米初等教育に見る思考表現のスタイル』東洋館出版社